

あんなにもこくあおおとしていた青空は、緋色と藤色と夜色と白光を含んだ複雑な色が丁寧に塗られている。雲はまぼろしか霧のように、おぼろげに漂っている。

海岸沿いの未舗装道路を二人乗りの自転車がすすむ。自転車は明らかに年季が入っている。きいきい、ぎしぎし、笑うような音を立てる。視覚からも年季の入り知れる。替えの効かない部分にはもれなく錆が見られる。逆に言えば、替えの効く部分はすべて新しくった。ハンドルが内側に湾曲したその自転車は、どうにもずっと以前の型のようだ。

「ふつうさ、こういうのって男の子がこぐものじゃないの……!!」

「たしかにそういうものだが仕方がない。おれが勝ったんだから」

ペダルをつよく踏みながらエミリアがふまんを叫んだが、彼女の身体にしがみつくことなく荷台に器用に座るダニエルが冷徹に言い放った。

エミリアは不満を隠さない。

「え、もう交代しようよ」

「まだ三分も経ってないよ」

「されど、だよ」

「俺が言っても絶対に聞き入れないくせに？」

「今日の夜はしっかりサービスしてあげるから」

ダニエルは単純な男だった。愛する女性との夜を楽しむためにならだいたいなんでもした。弟がふたりいる彼にとって二人乗りなどイージーな事柄で、それは『だいたい』の枠に入った。

「よろこんで、御姫様」

「あはっ」

エミリアは彼から向けられる性欲と、ちいさなこどもにたいするようなやさしい言い方が嬉しくて、愉快げに笑った。彼女がブレーキをかけ、自転車はゆるやかに止まった。

「それじゃ——」

荷台から下りたダニエルは約束の履行を念押ししようとしたが、それは叶わなかった。そもそもそうする必要はなかったと言える。

ちゅ。

エミリアは振り向きざまに接吻した。彼女のくちびるは、彼に対して用いられる時のみにプリンのようなやわらかさを發揮した。事実、ダニエルは天使のくちづけを受けたのかと勘違いした。

「え、天使……?」

「あなた無神論者でしょ」

ダニエルが愛する彼女は口元を隠して品よく笑った。エミリアが愛する彼は、目の前の女性が愛おしくて仕方がなかった。彼女もそう感じた。

そして、彼と彼女は同じことを想った。『愛』さえあれば、と。